

日本語を学ぶ大学生と高齢者の世代間オンライン交流における実践報告
Inter-generational Online Communication between Japanese Language Learners and Older Adults

赤井佐和子、ヒューロン大学
福井視、ヒューロン大学
Sawako Akai, Huron University College
Mitsume Fukui, Huron University College

1. はじめに

本発表では、中級レベル日本語授業における経験学習(Experience Learning)の試みについて報告する。経験学習とは、自分がもつ知識や技能を教室の外で実践し、その経験を通して省察、学びを得る学習方法であり、オンタリオ州政府は大学教育に経験学習を含むことを強く勧めている(Government of Ontario, 2016)。2020年、新型コロナウイルス感染拡大回避のため大学の授業はオンラインに移行し、それによりオンラインでの経験学習の機会を探していた。同時に、オンタリオ州では、新型コロナウイルス拡大の影響でソーシャルディスタンスや社会的孤立が高齢者に与える影響が問題視されていた。特にパンデミック宣言後カナダのシニアホームでは、家族の訪問が禁止、ボランティアが行っていたアクティビティも中止となり、社会からは最小限のコンタクトしか許されていなかった。社会からの孤立や寂しさは体調や精神面に悪い影響を与え(Findlay, 2003; Hawkey & Cacioppo, 2013)、鬱(Mead et al., 2010)や認知症(Kuiper et al., 2015)、睡眠障害(Kurina et al., 2011)、時には死(Holt-Lunstad et al., 2015)を導くこともある。このコロナ禍が長期続くであろうと予期した私たちは、日系シニアレジデンスのスタッフと連携し、日本語を学ぶ大学生がオンラインで高齢者と繋がる経験学習を含んだプロジェクトを作ることに至った。したがって、今回実施した世代間オンライン交流プロジェクトでは、大学生である学習者の成長を図るためだけでなく、社会から孤立した高齢者の寂しさ改善を図るためにも行われた。

2. 高等教育における経験学習(Experiential Learning)

経験学習とは、学んできたことを教室の外で実践し、その経験を通して省察、学びを得る学習方法(Kolb, 1984)であり、オンタリオ州政府は大学教育に経験学習を含むことを強く進めている(Government of Ontario, 2016)。筆者らの勤務校では、高等教育省(Ministry of Training, Colleges and Universities)のガイドラインに基づき、コースアクティビティが経験学習となりうるための6つの項目を定めている(Western University, 2022)。

- 職場または現実的な職場設定において知識や能力を応用できる。
- 応用力、キャリア能力、市民権を強化する。
- 道徳的なアプローチ、学習成果、活発で継続的な監督やメンターシップを含む。

- 理論と実践の相互関係を促進する。
- 学生の省察を導き、学習成果の評価を含む。
- 経験をカリキュラムの一部として認める。

このような経験学習は、大学のコースではケーススタディ (case based learning) やインターンシップによく見られ、また、コミュニティ活動 (community engaged learning) やボランティアで経験学習を含む場合はサービスラーニング (Parker-Gwin & Mabry, 1998) とも言われる。

今回行われたプロジェクトは、学習言語である日本語を使う環境で、学生はもっている知識を高齢者とシェアし、コロナ禍の中、お互いに励ましあった。また、プロジェクト前には、高齢者とのコミュニケーションの仕方、および、敬語についての講義を行い、全ての活動は、担当教員とティーチングアシスタントのもとで行われた。学生の省察を図るため定期的に作文が課され、その作文はコース評価の一部となった。それゆえ、今回のプロジェクトは、コロナ禍の中オンライン上で行われた外国語授業での経験学習であり、コミュニティサービスを含むサービスラーニングでもある。

3. 世代間オンライン交流プロジェクトの目的と内容

3.1. プロジェクトの目的

今回のプロジェクトの目的には3つある。(1) 日系シニアレジデンスと、日本語プログラムがある筆者らの勤務校とパートナーシップを結ぶこと。(2) 交流を行うこと。交流には、シニアレジデンスでのオンラインワークショップの開催、マニュアルの作成、1学年間のスカイプコール、オンラインでの文化発表の開催、が含まれる。(3) 交流の影響について調査すること。この発表では、日系シニアレジデンスの高齢者とのオンライン交流によって学生が何を体験し学んだか、報告する。

3.2. プロジェクトパートナー

プロジェクトパートナーであるシニアレジデンスは、オンタリオ州で唯一日系カナダ人高齢者を対象とした施設である。コロナ禍により、全ての行事やワークショップが中止になり、住民は「電話によるフレンドリー訪問プログラム」(週に一度ボランティアの人と電話で話す)のみが外と関われる活動となった。(のちに、zoomでのアクティビティが始まる。)このプロジェクトではスカイプが使われ10名のレジデントである高齢者が参加、途中、3名が病気等の理由で脱退。学生による文化発表には10名から20名の高齢者が参加した(部屋の人数制限による)。また、日本語より英語を好む高齢者とは英語での交流を行った。

3.3. プロジェクトの内容

プロジェクトのアクティビティには5つある。

- スカイプコール
学生はグループ分けされ、各グループに高齢者1人が含まれた。授業外の決められた時間に週1回20分ほどスカイプで会話をした。
- 日本文化発表

学生は好きな日本文化について日本語で発表した。トピックは、日本文化（音楽、服、食べ物、祭り、お正月、ドラマと映画、ゆるキャラ、ポケモン）や日本の町（沖縄、大阪、京都）、そして、日本の便利な支払い方法について、があった。学生は3名または4名のグループで、トピックを自由に選び、20分の日本語音声入りパワーポイントスライドを作成した。スライドには、日本語がわからない高齢者のために英語と日本語が使われ、音声のスクリプトも両言語用意した。発表は授業外の時間に行われ、シニアレジデンスのコモンルームと各発表者を zoom で繋げて行われた。毎週、授業外の時間に2組の発表が行われ、発表の参加者は、高齢者約10名、スタッフ2名、学生3名または4名、担当教員2名であった。発表の後、学生主導の質疑応答が10分ほど、日本語と英語で行われた。

- クリスマスカード・年賀状の作成
12月に学生は高齢者スカイプパートナーにグループでカードを作成した。カードには、新年の挨拶、写真、絵などが描かれ、デジタルで提出されたものをカラー印刷しシニアレジデンスへ郵送された。
- ジャーナル3回
プロジェクト前、中、終わりと、3回に分け、プロジェクトへの期待や感想など、1ページほどの短い作文を日本語で書いた。
- 作文
「高齢者と交流して学んだことをどのように自分の環境へ応用するか」というテーマの作文を学年末最後に2ページほど日本語で書いた。

以下、プロジェクトの流れの一覧である。

2020年

- | | |
|-----|---|
| 3月 | パンデミック宣言の前からシニアレジデンスのスタッフと協働プロジェクトの可能性について構想が始められていたが、パンデミック宣言直後、具体的に話し合いを始める。 |
| 夏 | プロジェクトチーム発足（日本語クラス担当教員2名、老年学教授1名、学生リサーチアシスタント2名）。シニアレジデンスのスタッフとスケジュールを作成。高齢者のためのタブレットの使い方、スカイプの使い方のマニュアルを作成する。 |
| 9月 | 日本語クラス：高齢者とのコミュニケーションの仕方について、老年学教授によるワークショップを行う。また、プロジェクトの説明、敬語の使い方について、リサーチアシスタントによるワークショップを行う。
シニアレジデンス：参加者募集、プロジェクトの説明、タブレット・スカイプの使い方を学ぶワークショップを行う。 |
| 10月 | 交流開始。スカイプコールと日本文化発表を週に一度行う。
ジャーナル1提出。 |
| 12月 | 日本文化発表終了。
学生からクリスマスカードを送る。
ジャーナル2提出。 |

2021年

- 2月 ジャーナル3提出。
3月 スカイプコール終了。
作文提出。

4. 調査・分析方法

4.1. 調査方法

1学年間を通してデータが収集された。データは、学生の課題であった、ジャーナル(小作文)3点と作文1点である。

4.2. 調査対象者

このプロジェクトは、筆者らの勤務するカナダ・オンタリオ州にある大学の中級日本語コースの一環として行われた。調査対象者は2020-2021年度に日本語レベル3のコースを履修、プロジェクトの全ての課題を提出し、研究参加承諾をした22名である。

4.3. 分析方法

収集したデータはNVivo12を用いて3名で質的内容分析を行った。本研究で追求する課題「学生への影響」について具体的で明確に書かれ繰り返し現れるものにコードをふり、カテゴリー分けした。コードをふる作業には、3名で話し合いをして決め、カテゴリーを定式化した。

5. 結果

記述データを分析し、「会話の難しさ」「高齢者パートナー」「意識変化」という3つの観点から述べる。

5.1. 会話の難しさ

調査対象者全員の作文から日本語を話す時の「会話の難しさ」に関しての意見が見られた。特に、会話のテーマ、丁寧・敬語で話す、スピーキング、リスニングが難しく感じた要因であった。

- 授業と違って、会話のテーマはランダムでオーセンティック。文化・年齢の違いから共通点を見出しにくい。クラスメートとは同じ日本語のレベルで話すけど、高齢者パートナーとは難しい内容で長い会話になる。
- 敬語の表現を忘れてカジュアルに話してしまう。敬語・謙譲語・丁寧語が混ざってしまう。
- 緊張して話したいことが話せなかったり、話すタイミングがわからなかったり、話していると文法を忘れてしまう。単語力・スピーキングの練習が欠けていることを実感。
- 高齢者パートナーは早くたくさん話すから聞き取れない。知らない文法や単語、方言があってわからない。

5.2. 高齢者パートナー

高齢者パートナーとの会話から、言語以外の知識を得た。例えば、パートナーの生き方や価値観、日常生活、歴史や文化、話し方などである。

- 高齢者パートナーの昔話を通して生きる姿勢を学んだり、将来のアドバイスをもらったりした。
- 日々の出来事や趣味、健康の秘訣、コロナの環境などについて話した。ビデオで建物や身近にあるものを見せてもらった。
- 高齢者パートナーのルーツから日系カナダ人の歴史や日本の慣習、伝統、宗教、音楽などの文化について教えてもらった。
- 見ず知らずの人と話すことによって人前で話すスキルや、年上の方との話し方、日常の日本語、日本語で説明する力を学んだ。

5.3. 意識変化

高齢者パートナーとの交流から、共感、考え方の変化が見られた。特に、言語学習観と高齢者・社会観についての意識変化が見られた。

- 色々な話題について話すことにより自分の日本語力を実感したり、親切なパートナーにもっと話したいと思ったりして、日本語学習へのやる気が芽生えた。
- 実際の会話は教科書とあまり関係なく自由であるが、間違いを自分で気付く大切さを学んだ。
- 高齢者施設や高齢者のイメージが変わり、高齢者のために役に立ちたいと思う。また、高齢者への関心を持つことが大事であり社会の課題であると思う。
- 自分の祖父母に対しての理解が深まり、今回の交流で学んだことを応用したいと思う。

6. プロジェクトの効果と課題

6.1. 言語学習としてのプロジェクトの効果と課題

今回の対象学生は、日本語を勉強し始めて3年目の中級レベルの学生であった。

ACTFL (American Council for Teaching of Foreign Language) の OPI (Oral Proficiency Interview) (2012) によると、中級レベルは、3レベルに分かれており、初級と比べると幅が広い。そのため、日本語学習者の多くはここに属し、自己の日本語力が上がっていく実感を感じるのは難しい。また、中級の中から上へ、さらに、中級から上級に上がれる鍵は、非母語話者に慣れていない母語話者にどれだけ理解してもらうことができるかである。ゆえに、教室外の日本語話者にたくさん接することが大事である。今回のプロジェクトでは、学校以外で話したことがない学生にとって、見知らぬ人と話すことへの戸惑い、自分の期待と現実の狭間での葛藤は大きかったようである。特に、まだ習い始めたばかりの敬語を使うことに苦戦していたことも見られる。しかし、このような挑戦の繰り返しにより学生は自信をつけ、もっと勉強したいというやる気に繋がったことが観察された。

今後の課題としては、授業の内容と実際の会話の差をどのように埋めるか、ということが挙げられる。限られた授業時間内であるが、予測される会話を練習したり、授業内で知らない人と話す機会を作ったりすることも事前練習として役に立つであろう。また、中級レベルの学生は非母語話者の応対に慣れた話し相手なら理解してもらえるが、非母語話者に慣れていない母語話者に理解してもらえない場合も多い。高齢者パートナーの中には日本語学習者と話すことに慣れていない人もいたため、会話についていけない学生も見られた。そのような時は、教員とアシスタントが介入し、会話の補助を行った。このように、いきなり見知らぬ人との日常会話に学生を投げ出すのではなく、中級の学生には、教員や上級話者が誘導し、徐々に独立させていくことが大事であるということも学んだ。

6.2. 経験学習 (Experiential Learning) としてのプロジェクトの効果と課題

各々が大変な状況にあるコロナ禍中このプロジェクトは「困難な時期にお互いをつなぐ機会」(学生6)であり、高齢者施設での様子を見聞きしながら、自分の環境だけに囚われないで「コロナに打ち勝つ」という社会共通の認識を生んだ。まず、身近な高齢者、特に祖父母に対しての理解やお手伝いをするなど自分の環境への応用が見られた。そして、「高齢者施設は寂しくて怖い、高齢者施設に住んでいる人の子供は親を高齢者施設に捨てた悪い人間だと思っていたが、そうではない。・・・高齢者たちの生活は大きい問題です。高齢者の衣食住と医療サービスと精神のケアはお金と精力を費やすから一部の人には面倒だと思う。でも、誰もが年をとる。自分の未来のためにも、もっと高齢者への関心を持つべきだと思います。」(学生16)のような高齢者・高齢社会への見方の変化が見られた学生もいた。これらは経験学習の目標として大学が掲げる「市民権の強化」に当てはまる。

また、言語学習における経験学習の要として、傾聴力の育成が挙げられる。「人の話をちゃんと聞くのは大事で、このプロジェクトでは、人の話を聞くスキルを練習しました」(学生28)のコメントにあるように、日本語での長く深い会話を理解することに困難を感じつつも、じっくり話を聞くことによって、学習者に変容が見られた。このような傾聴力は、社会基礎力の一つ(経済産業省, 2006)であり、発信力とともにグローバル人材に求められる能力の一つ(産学人材育成パートナーシップグローバル人材育成委員会, 2010)と言われている。教員も学生も日本語が話せることに重きを置いてしまいが、よりよい人間関係の構築のために、聞く力、特にじっくり話を聞くことの大切さも実感した。

今回のプロジェクトは初めての試みということもあり、コロナの状況を見ながら方針を変えたりしたので、学生には柔軟な対応が求められた。事前にプロジェクト内容を伝え、学生に準備する期間を与えることが成功の鍵となるであろう。

7. まとめ

本発表では、学習者が社会と繋がることによって、学習者の変容および成長があることを提案した。実践研究について、広瀬は「実践の改善を閉じられた教室だけのものとしせず、個々の実践がつながり、相互作用とすることで、教室に限定されないコミュニティとしての発達の方向性が共有されるような実践研究が行われるべき」(2014: p.66)と

考える。今回の実践報告では、コロナ禍の中、学習者が教室の外にあるコミュニティと個々に繋がり、コロナに負けないという共通目標を持つことによってそれぞれ成長が見られた。この成長は、言語能力だけに限らず、人材育成としての人の成長が見られ、大学の外で行われる学習が与える経験は言語学習観だけでなく、社会観へも影響を与えた。経験学習では、教師も大学の外と繋がる。私たち教員にとってもパートナー施設とのやり取りを通して、大学内では得られない学びがあり、学校以外にも学びの場があることを痛感した。コロナ禍は、私たちの日常生活、経済活動に大きな影響を与えたが、他者と繋がることがいかに大事であるか再認識し、思いやりの心の大切さを学ぶ社会を作った。そして、ウェルビーイングが注目されるポストコロナ時代(三菱総合研究所、2022)の今、学習者の学習観、教師の教育観のシフトの重要性は言うまでもない。今後、これからの日本語教育のありかたについて、さらなる研究を続けていきたい。

今回の分析は課題の一部である記述データを使って教員含むプロジェクトチームが行った。どうやって学びが得られたかというのは決して高齢者パートナーとの交流だけからではないという質的研究の限界をここに述べておく。

謝辞

本研究は SSHRC 1008-2020-0058 の助成を受けたもので、その調査の一部です。

参考文献

- 経済産業省 (2006) 『社会人基礎力』 <https://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/index.html>
(2022年8月30日)
- 産学人材育成パートナーシップグローバル人材育成委員会 (2010) 『報告書 産学官でグローバル人材の育成を』
<https://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/8422823/www.meti.go.jp/press/20100423007/20100423007-3.pdf> (2022年8月30日)
- 広瀬和佳子(2014) 「日本語教育における質的研究：教育実践者が実践を記述する意義」『質的心理学フォーラム』6, pp.60-67
- 三菱総合研究所 (2022)
『ポストコロナ社会のウェルビーイング：MRI版ウェルビーイング指標の活用を目指して』 <https://www.mri.co.jp/knowledge/insight/dia6ou000003zc7t-att/er20210309pec.pdf> (2022年8月30日)
- ACTFL (2012). *ACTFL Proficiency Guidelines 2012*.
Retrieved August 30, 2022, from <https://www.actfl.org/resources/actfl-proficiency-guidelines-2012/japanese>
- Findlay, R. A. (2003). [Interventions to reduce social isolation amongst older people: Where is the evidence?](#) *Ageing and Society*, 23, 647-658.
- Government of Ontario. (2016). *Building the Workforce of Tomorrow: A Shared Responsibility*.
Retrieved August 30, 2022, from <https://www.ontario.ca/page/building-workforce-tomorrow-shared-responsibility>.

- Hawkley, L. C., & Cacioppo, J. T. (2010). Loneliness matters: [A theoretical and empirical review of consequences and mechanisms](#). *Annals of Behavioral Medicine*, 40(2), 218–227.
- Holt-Lunstad, J., Smith, T.B., Baker, M., Harris, T., Stephenson, D. (2015). Loneliness and social isolation as risk factors for mortality: a meta-analytic review. *Perspectives in Psychological Science*, 10(2), 227-237.
- Kolb, D. A. (1984). *Experiential learning: Experience as the source of learning and development* (Vol. 1). Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.
- Kuiper, J.S., Zuidersma, M., Oude Voshaar, R.C., Zuidema S.U., van den Heuvel, Stolk R.P., et al. (2015). Social relationships and risk of dementia: A systematic review and meta-analysis of longitudinal cohort studies. *Ageing research Review*, 22, 39-57.
- Kurina, L. M., Knutson, K. L., Hawkley, L. C., Cacioppo, J. T., Lauderdale, D. S., & Ober, C. (2011). [Loneliness is associated with sleep fragmentation in a communal society](#). *Sleep*, 34(11). 1519-1526.
- Mead, N., Lester, H., Chew-Graham, C., Gask, L., & Bower, P. (2010). [Effects of befriending on depressive symptoms and distress: Systematic review and meta-analysis](#). *The British Journal of Psychiatry*, 196(2), 96-101.
- Parker-Gwin, R., & Mabry, J. B. (1998). Service learning as pedagogy and civic education: Comparing outcomes for three models. *Teaching Sociology*, 26 (4), 276-291.
- Western University. (2022). *Experiential learning at Western*. Retrieved August 30, 2022, from <http://experience.uwo.ca/about/Western-University-EL-Typology-.pdf>